慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Sutton Hoo Ship-Burialと Beowulfについて
Sub Title	Sutton Hoo Ship-Burial and Beowulf
Author	尾藤, 充(Oto, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.235(112)- 246(101)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0246

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

SUTTON HOO SHIP-BURIAL と *BEOWULF* について

尾　藤　　充

I

英国 Suffolk の Deben 河口，海から約六哩の東岸，対岸に Woodbridge の町と面した Sutton Hoo に一群をなした十一の塚がある。1939 年にその一つから発掘された，いわゆる，Sutton Hoo ship-burial[1] は Anglo-Saxon 人の文化水準に関して従来抱かれていた考えを大きく転換させるものであった。考古学上のみならず，Anglo-Saxon の文化の上で一大記念碑であるこの船の葬儀の遺物については，British Museum 発行のプレート，図解の豊富な案内書[2]によりその一端を容易に知ることができる。

発掘された人工物の作られた地は広範囲にわたり，優秀な高度の技芸水準を示す金の宝石細工は East Anglia 固有のものであるが，金貨は Merovingian Frankish であり，皇帝 Anastasius I の刻印のある銀製の大皿をはじめとして，銀器は Byzantine Empire のものである。Celt の影響は釣り鉢（hanging-bowls）に認められ，王家の祖先伝来の家宝である楯，冑は Sweden で作られたものであり，剣の装飾にも Sweden との関連が認められる。また楯の竜と考えられる装飾模様は Finland の考古学上の出土品の模様との酷似が指摘されている。[3]

つまり七世紀初頭の East Anglia には広範囲にわたり海外諸国との接触，交流のあとがみられ，技芸上の発展及び非常に高度の文化が存在していたことが明らかにされている。

ところで Sutton Hoo の船の葬儀の遺物は "heroic-elegiac poem"[4] と称すべき *Beowulf*

と互いに補足しあう密接な関係を有する。云うまでもなく Sutton Hoo の発掘の最も重要な特徴の一つは，前例をみない豊富な埋蔵物が当時としては例外的とも云い得る大きな船[5]の中に置かれていたことである。このことは *Beowulf* の冒頭に描写されている Scyld Scefing の豪華をきわめた船の葬儀のくだり（ll. 25--56）及び Beowulf 自身の葬儀の場面（ll. 3137—3182）を連想させる。もちろん Sutton Hoo の船の葬儀と *Beowulf* の二つの例の間には著るしい相違が認められる。Scyld の場合には葬儀の船は土中に埋葬されず，幾多の宝物，武具と共に潮の流れが運ぶのに委せられ，また Beowulf の遺体は冑，楯，鎧と共に火葬に付され，彼が生命を賭して竜から奪った財宝，黄金はすべて彼の墓として築かれた塚の中に納められている。しかし，このような相違は別として，*Beowulf* の例は Sutton Hoo の船の葬儀は公けに Suffolk の Deben 河畔で行われたことを明らかにするものである。

Sutton Hoo より出土した金銀の宝石細工，金貨，武具などは *Beowulf* に描写されたものが，詩的誇張ではなく実在したものであることを示すと共に *Beowulf* 中の描写の visual な理解に大いに助けとなるものである。その例として wirum bewunden walu (l. 1031) の walu[6] が復元された冑からその形を知り機能を理解できるようになったこと，また当初は得体が知れず大飾台くらいに考えられていた鉄製の物体が，*Beowulf* の中に描写されている segn 或いは cumbol より standard「幟」「旗印」と同一視されるにいたったこと[7]，また Frobgar 王の詩人（scop）が天地創造を歌うところにも出て来る竪琴は小型のものの断片が発掘され，復元されたことなどが挙げられる。

また Sutton Hoo の船の葬儀の遺物には Anglo-Saxon 文化の特徴[8]である異質性，異種混交が明瞭に認められることに注意すべきであろう。つまり Woden 崇拝とキリスト教の象徴ともいうべきものが船の中央部に同居している。まず船の葬儀自体がキリスト教以前のものであるが，旗印の先端の青銅の牡鹿の像[9]は *Beowulf* 中の Hrobgar 王の宮殿 Heorot(literally "stag")を連想せしめるが，Woden 崇拝に伴う魔力のようなものを感じさせる[10]。また冑には装飾の一つとして，剣と槍を抱え，角製の大きな頭飾りをつけて踊っている対になった二人の神のような，片目の人物像が彫られているが，この剣の舞も Woden に関する ritual と解され，楯の装飾の *Beowulf* の火竜を想起させる竜と思われる怪物も異教的なものと考えられる。キリスト教的色彩を帯びるものには，Saulos 及び Paulos とギリシヤ文字で刻まれた二本の対をなした銀の匙をはじめとして十字架の模様を有する十枚一組の銀製の盆その他がある。

この小論では問題をしぼり，次に (1)船の葬儀の主人公は誰か，(2) Sutton Hoo ship-burial との関係に於いて *Beowulf* の制作年代及び場所に関しての私見を簡単に述べたいと思う。

II

Sutton Hoo の船の遺物には，土葬火葬のいずれにせよ人体の残存物が認められなかったことは，発掘に携わった関係者全員の一致するところである。更に厳密な化学検査を施した結果として，遺骸が最初から葬られてはいなかったことが明らかにされている。つまり，Sutton Hoo の船の葬儀は死体の埋葬されていない cenotaph なのである。その理由としては，遺体はおそらく戦いか，あるいは海上で消失したか，さもなければ別の場所に葬られている人物の記念塚として造られたものであるということが考えられる。それでは一体この船の葬儀は誰のためになされたのであろうかという，いわゆる，"Who was he?" の問題が当然生じる。

当時，財宝は *Beowulf* の例[1] が示すように，王の手中に帰していた。船の葬儀の規模が大きく，発掘物が優秀で，旗印や，儀式に用いる笏と解される，類例のない巨大な砥石 (whet-stone) をはじめ権力の象徴，あるいは王家の表章と見做されるものが多数あり，また Suffolk の南東部は East Anglia の政治上の心臓部であったと考えられ，事実 Sutton Hoo の北方四哩たらずの所に East Anglia の王室の所在地である[2] Rendlesham があったところからして，船の葬儀の主人公は Wuffingas[3] と称される East Anglia の王であることは疑問の余地がない。

H. M. Chadwick は発掘の翌年1940年に，"Who was He ?" と題する論文[4] でこの問題を追求した。彼の論文はその後の探索の基盤をなすものであるが，不幸にして貨幣上の証拠を参照できなかったため，彼は Bretwalda[5] と称された Redwald（死亡626年以前）を船の葬儀の主人公に帰した。しかし，1946年に John Allan は「埋蔵された貨幣は 650 年以降に蒐集されたと云えば確かに間違いはないが，私はその年代が 670 年により近いことに殆んど疑念を持たない」と発表した[6]。Philip Grierson は更に正確に 650 年と 660 年の間の年代としている[7]。この金貨の推定年代から，Chadwick が結論として達した Redwald は問題外となった。貨幣の蒐集が 650 年以降とすれば，船の葬儀も当然この年代より後になるわけである。

650年から670年の間に三人の East Anglia の王が死亡している。すなわち，Anna,

Aethelhere 及び Aethelwald であって，死の年代はそれぞれ，654年，655年，及び663年又は664年である。それ故，船の葬儀が East Anglia の或る王のためのものであり，貨幣上の証拠が揺るぎないものであるならば，上記三名の王の一人が主人公であると考えて誤りはないわけである。ただこの "Who was he ?" の問題は Anglo-Saxon の謎詩 (Riddles) のあるもののおもむきがあり，この三人にはいずれも可能性が考えられる。

Chadwick は船の葬儀の年代を640年以降に難色を示しながらも一応の可能性を考え，五人の王の名を挙げている。すなわち，Sigeberht, Ecgric（共に640年直後に戦死），Anna, Aethelhere, Aethelwald である。Chadwick はこのうち明らかに Christian であった Sigeberht, Anna 及び Aethelwald を考慮の外に置き，異教を奉じたと見做される Aethelhere と何も知るところのない Ecgric のいずれかに帰した。この場合の結論として Chadwick は「もし葬儀が640年後に行われたとするならば，異教への計画的な復帰によるものと結論せねばならぬ」[8]と述べた。しかし Bede の記述には，他の国は別として，East Anglia が異教に復帰したということは記されてはいないのである。

R. L. S. Bruce-Mitford は *Provisional Guide* の第六章 'Who was he ?' の中で，明らかな留保をつけながら[9]，(1) cenotaph は King Aethelhere のものであり，(2) Sutton Hoo ship は655年の終り又は656年の初頭に埋葬されたものであるとの見解を示した。その理由として，船の葬儀が外見的に異教の伝統が強く，Bede の記述から Aethelhere 自身が異教を奉ずるものであったらしく，Sigeberht, Ecgric, 及び兄 Anna を殺した異教を信ずる Mercia の王 Penda と，キリスト教化した Northumbria の王 Oswy に対して，積極的に盟約を結び，最後には Yorkshire の Winwaed の戦いで，Oswy により Penda と共に死を遂げたこと，そして Bede に拠ると，この戦いでは大降雨による河の大氾濫のため，敗走の途上溺死した者が剣に斃れた者よりはるかに多かった[10]ことから，Sutton Hoo の船の葬儀が cenotaph であることが説明できようとしている。

しかしこの結論に対しては別な見地から考察を加えることが出来るのではなかろうか。第一に数年前には Sigeberht, Ecgric を殺害し，僅か一年前には Aethelhere の兄 Anna を倒して East Anglia の宿敵である Mercia の王 Penda と結び，自らはもとより，その軍勢にも悲惨な最期を遂げさせ，またキリスト教を信ずる妃が彼の許を去って Paris 近くの尼僧院に入っていた[11]ことから推して，国民に敬愛されたとも思われぬ僅かに在位一年の王 Aethelhere のために Redwald のような Bretwalda にこそ相応わしい盛大な船の葬儀が公けに East Anglia の民の前で催されるであろうか。*Beowulf* 中の

Scyld の船の葬儀，また特に Beowulf の葬儀に描写されている人々の死せる王に対する愛惜・哀悼の情を考えると，簡単には納得がいかない。

また Sutton Hoo の船の葬儀は外見のみならず本質的にも完全に異教的なものであろうか。七世紀に入ってからの East Anglia のキリスト教化に関しては，Bede の記述からうかがい知ることが出来る。Redwald は一たん改宗してから，王妃の使嗾により再び異教に戻り，同一の寺院内にキリストの祭壇と悪魔に捧げる犠牲のための祭壇を設けた[12]。彼の後を継ぎ，おそらく627年から8年にかけて改宗後間もなく一異教徒に刺殺された Eorpwald の時代より，三年間の混乱を経て631年，「すべての点に於いて最も Christianで，教義に通じていた」[13] Sigeberht が即位した。彼は王国を Ecgric に譲って自らのために設立した修道院に入り，Penda の侵入のため，国民の要請により，やむなく弟 Ecgric と迎え撃ち，共に戦死した。[14] そのあと王位を継承したのは信仰心篤い Anna である。このような過程から，East Anglia は異教より真のキリスト教化への過渡期を着実に歩んでいたことを読み取れるのである。

もし船の葬儀の主人公が Aethelhere であるとするなら，葬儀を施こした者は後継者であり，Rendlesham で Essex の王 Swidhelm が St. Cedd により洗礼を受けた時，教父の役をつとめた[15]ことから真摯な Christian であったと察せられる Aethelwald と考えられる。そうならば，特に関心を惹く Saulos 及び Paulos とギリシヤ文字で彫られた銀製の二本の匙はいかに解釈すべきであろうか。私はこの銘はユダヤ人の Saul が Damascus への路上で使徒 Paul となった奇蹟を意味するもので，教皇か司教よりの洗礼の祝の贈物とする見解に同意する。また剣の鞘の装飾的突起(scabbard-bosses)の十字架模様や，十枚一組[16]の銀の盆に装飾された同等の腕の長さの十字架は，単なる偶然的な装飾模様に過ぎないのであろうか。また台座に載った青銅の魚の像は，いわゆる，Christian fish-symbol ではなかろうか[17]。以上のうち，銀の匙を除けば，個々のものはキリスト教的意味あいを確信させはしないと云い得るが，集合的には，また遺体の安置されるべき所に集中していることは，周到な内在的意味を感じさせるものである。

以上からして，また *Beowulf* はもとより，*The Dream of the Rood* や Ruthwell Cross に典型的に示されている Anglo-Saxon の文化の特徴を思うと，Sutton Hoo の船の葬儀は異教の伝統に則した，遺体がいずこかの教会あるいは修道院に葬られた Christian である王のために設けられた記念塚と考えられる。このように主人公が Christian であったと推定すれば，Chadwick とは逆に，Anna と Aethelwald が考察の対象となる。

先に記した Bruce-Mitford の結論に対して Sune Lindqvist は考古学的・文化史的見地から Sutton Hoo の船が非常に豊富な供物で飾られていることは異教的精神ないしは願望を示す証拠とはならぬことを力説し，二本の銀の匙及び既に述べた十字架の模様を挙げ，十字架の象徴の意義は，埋蔵のための器具を選定する任に当った者に知られていなかった筈はないと述べた。次いで彼は Aethelwald を挙げ，その死が 663 年ないしは Whitby の宗教会議の催された664年で，貨幣の推定年代に近いところから，"Who was he ?" の問題に対し Aethelwald と解答している。[18] C. L. Wrenn も貨幣の推定年代が650年よりは70年に近いとされているところから，Aethelwald を ship-cenotaph の主人公と見做したい意向を表明している。[19]

しかし Aethelwald の名は Bede には Swidhelm の洗礼の際ただ一度しか現われず，*The Anglo-Saxon Chronicle* には記述がないことから推して，彼の治政はなんらきわ立ったことのない，波乱に乏しい時代であったと想像される。East Anglia の英雄時代は彼の頃には過ぎ去り，彼の死の頃には確固としたキリスト教化時代へと進んでいたと思われることから，古代のゲルマン的儀式に則った船の葬儀は理にそぐわないと私は思う。

それでは最後に残された候補者 Anna はどうであろうか。Anna は娘がみな修道女になり，うち三人は saint になったこと[20]，また自から Mercia の王 Penda に追放された Wessex の王 Coenwalh を改宗させている[21]ことから察せられるように信仰心篤く[22]，キリスト教化した East Anglia のみならず，キリスト教文明社会の指導者として精彩を放ち，Penda の East Anglia への侵入を敢然として撃退せんとした英雄的状況のうちに戦死している。また当時教会は改宗した王や王族の遺体を教会や修道院の聖域に埋葬することを主張しており，それ故 East Anglia にもこのような埋葬を受けいれる教会や修道院が多数存在していたものと云い得る。そして，事実，Chadwick に拠ると *Historia Eliensis* の Liber I, Cap. 7 には Anna の遺体は Blythburgh に葬られ，十二世紀に於てもなお尊崇の対象とされていると云われる。[23] 以上からして Bede の賞讃するごとく信仰心篤く，人格的に傑出していた Anna の死が East Anglia の人々に深い愛惜・哀悼の念をもたらしたことは想像に難くはない。

Bruce-Mitford が先の *Provisional Guide* に於けるとは見解を異にして指摘するように，[24]Sutton Hoo の船の葬儀のような記念碑は異教の世界よりキリスト教の世界への過渡期に於てのみ可能であり，また特徴であって，East Anglia の歴史上，初期の政治上

の野望の時代は終り，政治的には影の薄い存在とはなるがキリスト教化の進展して行く新らしい様相を示して行く時代に，East Anglia が達した最高点である Redwald の権力を象徴する王家の財宝は Anna の追憶と共に憩うべく埋蔵されるのが最も相応わしいと云い得る。

以上からして私は貨幣の推定年代を Philip Grierson の 650 年から 60 年の方に取り，Sutton Hoo の船の葬儀はおよそ十五年間の治政の後，654年に戦死した East Anglia の王 Anna のためになされたものではないかと考えるものである。

Ⅲ

Beowulf 中の Scyld 及び Beowulf の葬儀の描写から Sutton Hoo の船の葬儀がおそらくは654年に Suffolk の Deben 河口附近で公けになされ，当時の人々のよく関知する所であったことは，船を河より半哩も陸地に引き揚げ，深く掘り下げた地中に引き降ろし，更にその上に塚を築き上げるには相当の労力を必要としたであろうことから明瞭である。この船の葬儀の発掘は今日なお完全には解決されていない *Beowulf* の制作年代及び場所の問題に新らしい見方を与えるように思われる。

1948年に Sune Lindqvist は *Beowulf* の起源に大いに関連のある示唆に富んだ仮説を述べている。すなわち，彼は *Beowulf* 詩人の Scyld の船の葬儀と Beowulf の葬儀のくだりの明らかな混乱錯誤の説明を，Sutton Hoo の船の葬儀は詩の書かれた頃なお世人に記憶されていたのだということに求めた。「*Beowulf* の詩人は彼の時代に Sutton Hoo でなお記憶されていた埋葬の流儀にならった豪華な埋葬，及び埋蔵物を燃やさずに地下に放置しておくといった当時一般の考えがもっと古い時代にも同じくきまりであったのだと想像した」[1] と彼は解釈する。

ついで彼は *Beowulf* の詩人はその詩をある王朝の栄誉を讃えるために作ったのではなかろうかと考え，そうであればその王朝に属する者が *Beowulf* の中に現われていなければならぬと推論を進めた。当然察せられるように，Beowulf を除外すると，火竜との戦いに敢然として Beowulf に従った豪勇の貴人 Wiglaf を措いては他にいないことになる。Wiglaf は *Beowulf* の中で次のように呼ばれている。

i) Wiglaf wæs haten, Weoxstanes sunu,/leoflic lindwiga, leod Scylfinga,/mæg Ælfheres (ll. 2602—2604[a]).

ii) þu eart endelaf usses cynnes,/Wægmundinga (ll. 2813—2814[a]).

iii) byre Wihstanes (l. 2907^b).

Lindqvist は Weoxstan (Weohstan, Wihstan) をその論文の註で Wehha ? として[2], East Anglia の王室(Wuffingas)の系図中の Wehha と結びつけたい意向を示している。Scylfingas は Sweden の王朝に対する名称である。つまり, Wihstan を Wehha と同一視すると, Wihstan の息子で, Beowulf の血族である Wægmundingas[3] の最後の生き残りである Wiglaf はまた Sweden の王朝である Scylfingas の王子でもあったことになる。簡単に云うならば East Anglia の王朝は Sweden の王朝の分れたものということになる。Wrenn もこの Lindqvist の仮説を検討せずに受け入れているように思われる[4]。けれど Wihstan を Wehha と同一視する音韻上の説明はどうなされるのであろうか。考古学的見地より Sweden と East Anglia の間には非常に密接な関係があることから, その着眼点のすばらしさはともかくとして, 説明の伴わぬからには, いささか疑問を感じぬわけにはいかない。

しかし, それはさて措き, Sutton Hoo に記念されている王が654年に戦死した Anna であるならば, Lindqvist の示唆するように, その盛大な船の葬儀を記憶している者が *Beowulf* の製作年代としてよく挙げられる八世紀の初頭になお多数生存していたであろうことは当然推測される。そうであれば *Beowulf* と East Anglia の間には実在せる繋がりがあったことは確実であろう。

ところで D. Whitelock はその著 *The Audience of Beowulf* で, 文化的, 史的考察に基ずき八世紀の後半以降に *Beowulf* の製作年代を置くことを力説している。彼女は改宗が部分的でも表面的でもない Christian の聴衆のため詩人は *Beowulf* を作ったとし, 聴衆が Bible の事件を説明せずとも熟知している例として, Cain の Abel 殺害を挙げ, 殺害の理由が記されていないのは, 聴衆が既によくこのことを知っているからであり, また ll. 1689 以降の所で, 洪水に殺されたのが何故巨人の種族であるのかは, *Genesis* vi. 4 に通じていなければ不可解であろうと説く。またキリスト教において普通悪魔に用いられる表現, 例えば「地獄の捕虜」captivus inferni が helle hæfta (l. 788), 「古への敵」 hostis antiquus が eald-gewinna (l. 1776), 「人類の敵」hostis humani generis が feond mancynnes (l. 164) と訳されて Grendel に冠せられていることなど[5], その他多くの例を挙げ, *Beowulf* 中のキリスト教的詩語・文体が聴衆に完全に理解されるためには, Anglo-Saxon 人の改宗と *Beowulf* の成立の間には相当の期間の経過がなければならぬという傾聴すべき推論を樹てた。Whitelock はその著の後半を歴史的基盤

から，Mercia が *Beowulf* の制作された地であったかも知れぬことに費し，八世紀の末くらいおそい年代も *Beowulf* の製作には可能とし，J. Earle がかって表明した *Beowulf* は757年から796年まで治めた Mercia の Offa (Offa II) の宮廷のために作られたとの仮説[6]を復活させた。Whitelock はこう述べている。「私は757—796という年代は *Beowulf* にも *Widsith* 中の Offa の部分にもあり得ないほどおそいものとは思わない。それ故私は *Beowulf* は Offa the Great の宮廷に於いて創作されたということを可能な仮説，可能で魅力的な仮説，が証明不能の仮説と見做したい。」[7]

大陸の Offa I を系図に含んでいるのは Iclingas と称される Mercia の王家のみである[8]ところから，詩人が ll. 1931—62で Offa という名の王を最大級に賞讃しているのは，種族上の愛国心からと解せぬことはないのであるが，*Beowulf* 及び *Widsith* ll. 35—44 の Offa I を Mercia の Offa II と Whitelock のように見做すならば，*Beowulf* の制作年代は Sutton Hoo の船の葬儀からゆうに百年以上も後になる。*Beowulf* の制作時には Sutton Hoo での盛大な葬儀の様を，Scyld 及び Beowulf の葬儀の生彩ある描写から推して詩人も知っており，またその記憶を有する多くの人が生存していたとの仮定に立つならば，Whitelock の説は年代が余りにおそすぎて容易には首肯し難い。

Beowulf の制作年代には異説があるが[9]，多くの学者が Bede の時代 (*ca.* 673—735) の Northumbria に制作年代と場所を求めるのは，主として当時の Northumbria が高度の知的文化社会であったからであり，また Offa II の時代の Mercia 起源を証明する資料が欠如しているからである。

Beowulf の genesis の問題は実に難かしく，ここではもちろん詳述は出来ないが，East Anglia 起源の可能性も否定し去ることは出来ないと思う。Wuffingas の王朝は王 Aelfwald の死と共に749年に消滅した[10]ようであり，その後 Mercia の勢力下に置かれるのであるが，East Anglia については書き記された文書，文献が残っておらず，またそれ故 East Anglian と Mercian の言語上の相違についても何一つ知られてはいない。しかし，*Beowulf* の East Anglia 起源の可能性は存在するわけである。

Beowulf 中の Scyld 及び Beowulf の葬儀に描写されている財宝は詩的誇張ではなく，East Anglia 固有の高度の技芸水準を示す金の宝石細工より実在したものであることは明らかであり，また Sutton Hoo の発掘品より Redwald 以後の East Anglia には広範囲にわたる海外諸国との接触，交流のあとが見られ，その宮廷には一種の文化的雰囲気といったものが存在したことは疑問の余地がないであろう。とするならば，推測を一歩

進めて，現存する *Beowulf* MS. に，何度も筆写されたであろうにも拘らず，全く偶然かあるいは自動的に残っている有名な wundini (l. 1382) という形は言語的に750年以前と見做されていることも考慮に入れ，Whitelock の説くように *Beowulf* 中の implicit な語句や allusion に内在するキリスト教的意味あいを理解できると共に，種々の挿話にも通暁した人士が，Aethelwald の後継者である East Anglia の王 Aldwulf (死亡713年) の時代或いは St. Boniface と文通し，St. Guthlac の伝記の編纂を命じた[11] 教養ある，East Anglia の最後の王 Aelfwald の時代にも，政治上は衰退・滅亡期でありながら，多数存在し，おそらくそのような人士のために *Beowulf* は制作されたと考えることが出来るのではなかろうか。その理由の一つとして，王 Sigeberht が Kent より司教 Felix を迎え，彼の助力を得て，East Anglia の子弟の教学のため学校を開いた[12] ことが，East Anglia のキリスト教化ないし知的教化の向上に資するところが大きかったと考えられる故に，注目されてよいと私は思う。Whitelock の云葉を借りるなら，可能だが証明不能の仮説として，Bede の時代の Northumbria と共に，*Beowulf* の East Anglia 起源が Sutton Hoo の船の葬儀との関連に於いて考えられるのである。

註

I

(1) 発掘に関しては C. W. Philips, "The Excavation of the Sutton Hoo Ship-Burial," *Recent Archaeological Excavations in Britain*, edited by R. L. S. Bruce-Mitford, (London, 1956), pp. 145—165が要を得た記述である。1939年より1952年までの bibliography は Francis P. Magoun, "The Sutton Hoo Ship-Burial : A Chronological Bibliography," *Speculum*, Vol. XXIX (1954), pp. 116—124におさめられている。

(2) *The Sutton Hoo Ship-Burial : A Provisional Guide*, published by the Trustees of the British Museum, 1947; 8 th impression 1961. 本稿では *Provisional Guide* と略記する。

(3) Aarni Erä-Esko, "Sutton Hoo and Finland," *Speculum*, Vol. XXVIII (1953), pp. 514—515.

(4) J. R. R. Tolkien, *Beowulf : The Monsters and the Critics* (*The Proceedings of the British Academy*, Vol. XXII, Oxford, 1936); reprinted separate edition (Oxford, 1958), p. 33.

(5) *Provisional Guide*, Chapter IV, pp. 37—38を参照。

(6) 引用は C. L. Wrenn, *Beowulf with the Finnsburg Fragment* (London, 1953) のText に拠る。Walu については，*Provisional Guide*, Plate 11及び上記 Wrenn の *Beowulf*, p. 299

の walu の項，詳しくは R. L. S. Bruce-Mitford, "The Sutton Hoo Ship-Burial," R. H. Hodgkin's *A History of the Anglo-Saxons* (3 rd ed., Oxford, 1952), Vol. II, Appendix, Notes, pp. 752—754を参照。Fr. Klaeber はその *Beowulf and the Fight at Finnsburg* (3 rd ed., Boston, 1951) の Notes, p. 169 で次のように述べているが，これは訂正されねばならない。"The exact nature of a wala, which seems to be an ornamental as well as useful part of the helmet, is not known."

(7) D. E. Martin-Clarke, *Culture in Early Anglo-Saxon England* (Baltimore, 1947), pp. 70—72 ; *Provisional Guide*, p. 13を参照。

(8) *The Dream of the Rood* 及び Ruthwell Cross に典型的に示されているこの特徴に関しては Bedeの *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, I. xxx の教皇 Gregorius の Mellitus に宛てた書翰 (*Baedae Opera Historica*, Loeb Classical Library edition, Vol. I, pp. 160—164) に示されたイングランドに対する布教方針，及び厨川文夫教授「中世の英文学と英語」(研究社，初版，昭和26年)，pp. 3—7を参照。また Scyld 及び Beowulf の葬儀の描写に表わされている *Beowulf* の作者の見解については「英米文学史講座第一巻・中世」(研究社，昭和37年) の厨川文夫教授「ベーオウルフ」pp. 20—21 を参照。なお本稿では Bede よりの引用は Loeb Classical Library 版を用い，( ) の中に巻数，頁数を示した。

(9) Cf. eafor heafodsegn「野猪の像ある旗印」(*Beowulf*, l. 2152^{b}).

(10) C. L. Wrenn, "Sutton Hoo and *Beowulf*," Mélanges de lingustique et de philologie : Fernand Mossé in memoriam (Paris, 1959), p.497.

II

(1) Cf. ll. 2152—2176.

(2) Bede, III. xxii, (Vol. I, p. 441).

(3) Bede, II. xv, (Vol. I, p. 295). West-Saxon version を引用すると次の通りである。Wæs he se foresprecena cyning Rædwald æðelre gebyrde, þeah þe he on dæde unæðele wære: wæs he Tyteles sunu ; þæs fæder wæs Wuffa haten, from þæm Eastengla cyningas forðon Wuffingas wæron nemnde. (T. Miller, *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People* (EETS., OS., No. 95), London, 1890, p. 142).「前記の王 Redwald は所行は恥ずべきであったが，高貴の生まれであった。彼は Tytel の息子であり，彼 (Tytel) の父は Wuffa と呼ばれた。それ故に彼 (Wuffa) に因んで East Angles の王は Wuffingas と称された。」East Anglia の王家の系図は R. H. Hodgkin, *op. cit.*, Vol. II, p. 769 に記載されている。

(4) *Antiquity*, Vol. XIV (1940), pp. 76—87.

(5) Bede, II. v, (Vol. I, pp. 225—227) には七人の Bredwalda (=ruler of the Britons) と称された王の名が挙げられている。第四番目の Bredwalda である Redwald は East Anglia からはただ一人である。Chadwick, *op. cit.*, p. 79 の註を参照。

(6) *Provisional Guide*, p. 42の記述による。

(7) *Ibid.*, p. 42.

(8) *Op. cit.*, p. 84.

(9) 本稿に用いた 8th impression (1961) の *Provisional Guide* に付せられている Note on Fifth Impression [1956] の中で, 4th impression (1954) までに於けるとは見解を変え, Bruce-Mitford はcenotaph の主人公を Anna と見做し, 第六章 'Who was he?' を全面的に改訂した新しい *Provisional Guide* の edition の刊行が準備中であることを記している。

(10) Bede, Ⅲ. xxiv, (Vol. Ⅰ, p. 451).

(11) Chadwick, *op. cit.*, p. 82.

(12) Bede, Ⅱ. xv, (Vol. Ⅰ, p. 293).

(13) *Ibid.*, Ⅱ. xv, (Vol. Ⅰ, p. 295).

(14) *Ibid.*, Ⅲ. xviii, (Vol. Ⅰ, pp. 413—415).

(15) *Ibid.*, Ⅲ. xxii, (Vol. Ⅰ, p. 441).

(16) *Provisional Guide*, p. 47 の註を参照。

(17) R. L. S. Bruce-Mitford, *op. cit.*, Notes, p. 755 参照。

(18) Sune Lindqvist, "Sutton Hoo and *Beowulf*," *Antiquity*, Vol. XXⅡ (1948), translated from the Swedish by R. L. S. Bruce-Mitford, pp. 133—134参照。

(19) "Sutton Hoo and *Beowulf*," p. 504.

(20) Chadwick, *op. cit.*, p. 82 の註及び Bede, Ⅲ. viii. (Vol. Ⅰ, p. 363) を参照。

(21) Bede, Ⅲ. vii, (Vol. Ⅰ, p. 357).

(22) Cf. Bede, Ⅲ. xviii, (Vol. Ⅰ, p. 415).

(23) Chadwick, *op. cit.*, p. 81 に拠る。

(24) Bruce-Mitford, *op. cit.*, pp. 718—719参照。

Ⅲ

(1) *Op. cit.*, p. 139.

(2) *Ibid.*, p. 139.

(3) Fr. Klaeber は次のように述べている。"The *Wægmundingas* are best considered simply Geats." *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, Supplement, p. 452.

(4) Wrenn, "Sutton Hoo and *Beowulf*," p. 505.

(5) Dorothy Whitelock, *The Audience* of *Beowulf* (Oxford,1951), pp. 4—11参照。

(6) J. Earle, *The Deeds of Beowulf* (Oxford, 1892), pp. 1xxv-c 参照。

(7) *Op. cit.*, p. 64.

(8) R. H. Hodgkin, *op. cit.*, Vol. Ⅱ, p. 765 の表を参照。

(9) D. Whitelock, *op. cit.*, pp. 22—24に諸説が列挙されている。

(10) F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England* (Oxford, 2nd ed., 1955), p. 209.

(11) *Ibid.*, p. 209 の記述に拠る。

(12) Bede, Ⅲ. xviii, (Vol. Ⅰ, p. 413) 参照。